

## 長崎総合科学大学に於ける英語教育実践の一例と考察

前 川 智 子\*

## Pragmatic English Teaching: A Case Study

Tomoko MAEKAWA

The author, in the search for more effective approaches to teaching English at the university level, analyzed her five one-year English courses using the evaluations made by the students. First, the classroom activities in each course are described after an explanation of the ideology in teaching; learner-centered teaching, stress-free atmosphere, effective use of homework, and fair treatment and evaluation of the students. Then, course evaluation by the students is outlined in detail with charts. Students' questionnaire responses and essays showed that most of them were relaxed in the classroom, enjoyed the courses and sensed some progress in the four English skills. Although minor, however, several points requiring consideration were also revealed: A few students responded that they were not satisfied with the slow pace, while another few did not fully understand the courses even at such a slow pace; moreover, there were some who gave up the courses along the way. In conclusion, to improve the situation a fully-developed learner-centered approach is advocated in which all students learn cooperatively in groups and learn and teach each other, thereby eventually learning "how to learn."

## 1. 序

外国語教育においては理論と実践は時計の歯車のような関係で、両者がうまく噛み合ってこそ学習も指導も円滑に動く。Stern は、「外国語教師の多くは理論家であることを嫌いむしろ日々の教育現場での直感的、実践的指導法がものを言う」と信じており、理論的な事柄に対して否定的な態度を

とる傾向にある。しかし実際には理論と実践は強く結びついているのだ」と述べている。<sup>1</sup>

次の図は Stern の示す理論と実践の関係であるが、以下はそれについての彼の説明の要約である。<sup>1)</sup>

この図は上から下へでも下から上へでもどちらの方向へも読むことが出来る。下から見ていくと、一番底辺にあるのが言語教育に最低関わってくる学問分野である、言語教育史、言語学、社会言語

\*言語教育センター講師

1999年6月15日受付

<sup>1)</sup> この箇所や図2の引用箇所において Stern (1992) は単に“language”という語を用いているが、その“Introduction”で“This book is addressed to second or foreign language in general.”と言及していることと状況から判断して、ここでは明らかに“language”を外国語又は第二言語の意味で使用していることが分かる。従ってそのような場合には「外国語」という語を使用していく。

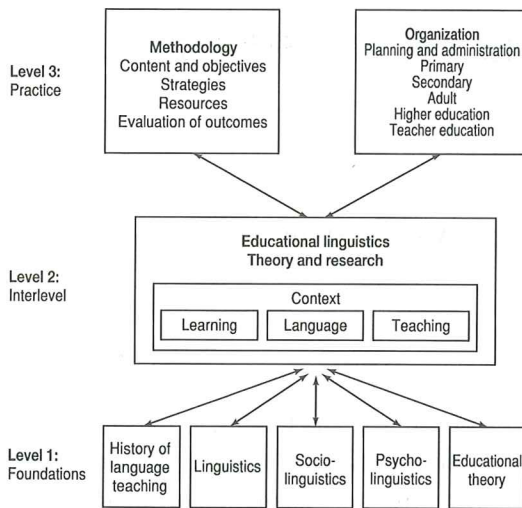


図1: “A conceptual framework for second language teaching theories”<sup>2</sup>

学、心理言語学、教育理論である。これらの知識が一緒になって次の段階の応用言語学、或いは言語学の観点から見た教育(“educational linguistics”)を形成するのであるが、この分野は言語・学習・指導・社会背景と深く関わっている。この中間段階である「Level 2」は、「Level 1」の一般的学問分野と「Level 3」の具体的な実践活動、言語教育の分野とを橋渡しするものである。そして「Level 3」は言語を学習・指導する「方法」の分野と、言語学習・指導のための機会を供給する「組織」分野とに分かれる。<sup>3</sup>

Stern は更に図1の「Level 2」と「Level 3」の左側の囲み(「Methodology」)を細分化し、理論、政策、実践の三者の関係を図式化している(図2)。下の図2に於いて、「Level 1」は図1の「Level 2」に相当し、「Level 2」と「Level 3」は図1の「Level 3」から派生したものである。即ち、図2の「Level 1」は言語教育に於ける根本的な考え方、「Level 2」は言語教育を行うに当たった特徴や方向性、「Level 3」は実際の教育現場での教師や学習者の取る行動、使用する教材・器械等である。

図1, 2の中で矢印が双方に向いているように、理論と実践は相互に行き交いながら作用し合っている。即ち、実践結果を基により良い理論を確立し、又、その理論を基にもっと良い実践授業を行っていき、更に理論を...という具合に理論と実践は磨き合っているのである。

大学又は学校に於ける外国語教育を考える場合、外国語教育の根本的な目的は何か、即ち外国語教育を通して学習者に何を学ばせたいのかという理念を基に、ではその理念追求のためには外国語の何を教育すべきであるのかを考える。そして教育すべき一般的な範疇が定まったところで、実際の授業を行うための具体的な策を練ることになる。更に実践の過程で、或いは実践の結果から新たな教育政策が考えられ、基本理念の変更ということもあるだろう。即ち、学習者や社会のニーズに合わせて外国語教育の根本的な目的も変化していく。

また、教師は教育の理念や目標に沿い且つ学習者の様々な要素(年齢、学習経験、知識、そこでの学習期間等)に合った実践計画の大枠(カリキュラム)を作り、次に理論と研究に基づいた効果的な指導法を考案しながら具体的な授業計画(シラバス)を作成し、それに基づいて日々の教育を行っていく。しかし実際の授業は計画どおりに進

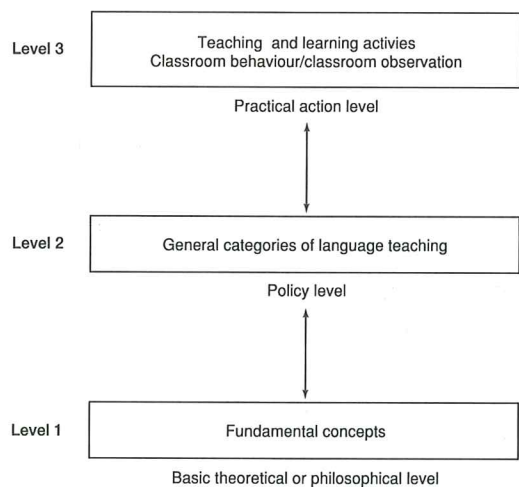


図2: “From deep to surface levels in language pedagogy”<sup>4</sup>

むことは少なく、寧ろ学習者の反応や理解の速度に合わせて毎回のシラバスを、授業を行いながら手直ししていくことが多い。そして毎時間の授業に於ける学習者の理解度と共に教師の指導法を吟味しながら、より良い次の授業を目指して再びシラバスを練り直すのである。そして更に、このような毎日の実践と考察から生み出された研究が貴重な資料となって理論を裏付け又は新たな理論を形成していくのである。

従って本稿ではまず初めに、後で紹介する実践活動全般に通じる英語教育上の筆者の基本的方針を述べ、次にそのような方針の基で行った、英語が苦手な学生に対する実践授業の内容（付録1）と学生による評価結果を報告する。そして最後に、この結果を分析しながら指導を反省し、特に英語を苦手とする学生に対するより効果的な英語教育の在り方を考察していきたい。ここでは個々の活動についての理論的裏付けに焦点を置くのではなく、あくまでも実践に導かれる結果に焦点を絞り今後の教育改善に繋ぎたい。事実を記述・分析していくことによって指導上の問題点を見出すこと、そしてその問題点を解決するための指導法を探ることが目的である。

尚、大学の教育科目は通常「講義」と表現されるが、演習中心である英語教育の特徴を表すためにここでは「授業」という語を使用している。

## 2. 実践報告

### 2. 1 教育の基本方針

#### 1) 学習者中心

英語力は学習者自らが考え、読み、書き、聴き、話すことを根気強く継続することによって向上するものであり、教師中心の講義形式ではその向上は余り期待できない。従って、教師は話す時間を極力減らし、学生自身が考え、活動するための時間を出来るだけ多く提供する必要がある。具体的には巻末の「付録1」に述べているが、学習者は予習を基にペアやグループ内で話し合い、活動す

る。その間教師は教室内を隈無く回り、個人的に質問を受ける。更に提出物を添削することで学生の犯しやすい誤りを把握し、それを全体で説明する、という具合である。このような学習者中心の授業では、レベルの違う学生に対して同じ教材を使いながらも、学習者のレベルに合わせた個別指導を可能な限り取り入れることが出来る。

#### 2) 間違いを許容し合う

日本の学生は発表することを極端に恐れる。答えに自信がない時は勿論、99%正解だと思っていても自主的に発表することを躊躇し、自分の考えを表現することが少ない。これは往々にして、「正解重視・思考過程軽視型」教育の落とし子とも言える。従ってまず、間違いをお互いに許容し合う雰囲気を作り、リラックスした状態で学ぶことが出来る環境を提供することが必要である。

「言語学習の効果は、学習の動機、必要性、学習に対する心構えと共に、感情の状態によって左右されるもので」<sup>5</sup>、学習者の不安感が少なく、リラックスしている時ほど言語習得の効果が高いということは多くの研究で証明されている。<sup>6,7</sup>

このような考えから筆者は常に、「人間は間違いから学ぶものである」という考えを繰り返し学生に言い聞かせ、間違えることを恐れない態度を身につけさせることを目指している。間違えることへの恐怖心がなくなり、お互いの間違いを許容し合う雰囲気が出来れば、学生はリラックスして学ぶことが出来るし、従って前述したように、学習効果を上げることが出来る。また、peer learningの機会を多く設け、仲間同士で学び合うことによって不得意科目の学習に対する過度の緊張感をなくすよう努めている。

このようにして教師と学習者、学習者間の温かい人間関係が形成され、学生が授業を「楽しむ」ようになった時、学習効果は最高に高められるものと信じている。

#### 3) 努力の評価

英語力は繰り返しの継続学習によって培われるものであるから、週1回の授業中の学習だけではその向上は余り期待できない。従ってそれを補う



ために毎回宿題を課し、宿題（予習）を基に授業を進めていく。且つ、提出された課題を添削・考察することで、よりきめ細かな指導を行うよう心掛けていく。そして、家庭学習の努力を認めるために毎回宿題点を付け、最終評価の時点では、全体の20～25%を宿題点として評価することになっている。これは、中学・高校での英語学習状況の違う学生を「試験」という1つの物差しだけで測ることは不公平だという考えから、又、英語が苦手な学生にも努力次第では良い評価を得ることが出来る可能性を与えることで、それまで英語を諦めていた学生に希望とやる気を持たせたいとの願いからである。

尚、以上の点についてはシラバスにも明記しているが、授業中にも事あるごとに公言し、教師の考え方が学生に伝わるようにしている。

## 2. 2 授業内容

下の表1は、98年度に筆者が担当した6クラスについての科目名、受講者数、出席率などを示している。「受講者数」は、2回以上授業に出席し、受講の意志を示した学生数であり、「落伍者数」は、それにも拘わらず出席日数不足で定期試験受験資格を喪失した者の数である。「平均欠席回数」

と「平均出席率」の計算には、落伍者も含まれている。

「付録1」には表1の順に各科目ごとに授業内容を簡単に述べているが、これは次章の「学生による評価」を分析、考察する時、授業の内容・進め方・指導法等と、それについての学生による評価との因果関係を分かりやすくするためである。尚、科目名については例えば「英語 IA(前期)」、英語 IC(後期)」を「IA/C」のように簡略化して記述していく。また、IA/Cの2クラスは同じ内容の授業を行い、且つデータに殆ど差がないのでまとめて言及する。

## 3. 結果と考察

「2. 1」の基本方針を持って「付録1」のような授業を1年間実践したのであるが、果たしてそれが効果的であったのだろうか。それを調べるために、無記名のアンケート（付録2）と記名の感想文（付録3）の2つの方法で、授業の学生による評価を実施した。前者は後期の最終授業日に、後者は後期試験の際に行った。以後、「アンケート」、「感想文」と区別して引用するが、両方の調査を分析した結果を示しながら、教材の難易度、英語力の向上、指導法、授業の雰囲気等について

表1：授業概要

科目名	対象学年等	期間等	受講者数	落伍者数	全回出席者数	平均欠席回数／1人	平均出席率
英語 I A/C 〔基礎英語〕	1年5組(情制一部)	月Ⅱ, 前・後	35人	4人	15人 (42.9%)	1.6回	87.7%
英語 I A/C 〔基礎英語〕	1年9組(建築一部, 住居一部)	月Ⅲ, 前・後	30人	1人	8人 (26.7%)	1.6回	87.9%
英語 I B/D	1年6組(経営全, 管理一部)	月Ⅱ, 前・後	19人	0人	9人 (47.4%)	1.1回	92.5%
英語Ⅱ A/C	2年7組(建築一部・管理一部)	火Ⅱ, 前・後	20人	0人	4人 (20%)	1.7回	86.9%
英語Ⅱ B/D	2年1組(機械一部, 情制一部)	水Ⅱ, 前・後	17人	4人	2人 (11.8%)	3.6回	71.9%
英語Ⅱ B(再)	3年以上再履修者	火Ⅰ, 通年	29人	11人	通年5人 (17.2%)	半期4.8回	61.4%



考察していく。

教育効果を測る方法としては、実験グループと非実験グループ間のデータの比較や同じグループ内での実践前後のデータの比較が行われる。又、使用するデータには試験結果を数字で比較する客観的評価方法と、学生自身や教師の感じによる主観的評価方法が通常使用される。評価の信頼性をより高めるには両方を併用すべきであるが、今回は特定の能力（例えば、リスニング力、ライティング力など）の向上に絞った評価ではなく、全体的な英語力の向上や教師の指導力に対する評価等を見ることが目的であることから、客観テストによるデータは使用していない。しかし、主観的データーをより信頼できるものとするために、アンケート形式と感想文形式という2種類の異なった評価方法を用いている。後で示されるように両データーに殆ど矛盾が見られないことから、これらの評価はかなり信頼性が高いと言えるのではないだろうか。尚、Painter<sup>8</sup>は、ある実践授業に於ける学習効果に対する、学習者自身と教師による主観的評価と、TOEICの得点向上率による客観的評価とを比較し、それらの高い相関関係を証明することで学生の自己評価の信頼性を論証している。

### 3. 1 教材

学習者のレベルと興味に合った教材を選ぶことは非常に難しいが、学習の興味を持続させる上で重要な要素である。ここで言及している授業は大学生用として市販されている教科書を中心に、時折他の教材も交えながら行ったが、表2は使用教

科書についての学生の意見（付録2）である。

IA/CとIIB/Dの教科書は殆どの学生が「普通」又は「易しい」と答えているが、IB/Dで使用した『Carpenters...』については32%が「難しい」と答えている。それは、後の「読解力」の所でも触れるが、この教科書の本文は7～8行の短い文章なのだが1文の長さが2～3行に亘る複雑な構文が多いためだと考えられる。IIA/CとIIB(再)はそれぞれ32%と25%が「難しい」と答えているが、この2つのクラスで使用した『Asia Now』については特にビデオ教材の聞き取りが難しかったのかもしれない。しかし授業を進めながら、IIACの学生には適度に難しくふさわしい教材であるがIIB(再)の学生にとっては難し過ぎるのではないかと反省していたので、この結果は以外であった。

教材をどのように利用するのかによっても異なるので一概には言えないが、少なくとも「難し過ぎるもの」と「易し過ぎるもの」は避けたい。学生の反応から受ける感触としては、英語が苦手な学生には「普通（丁度良い）」とを感じるものが、英語の得意な或いは明確な目標を持って学習している者にとっては「やや難しい」と感じる程度の教材が適当ではなかろうか。

### 3. 2 英語力の向上

次ページのグラフ（図3）は1年間（実質8ヶ月間）学んで英語力が向上したと思うかどうかのアンケート調査（付録2）を分析したもので、「読解力」など5つの項目について各科目ごとに表したものである。グラフの項目は左から、「かなり向上した」「向上した」「少し向上した」「全く向上しなかった」と答えた学生の割合を示している。

#### a. 読解力

読解力については全ての科目の殆ど（82～100%）の学生が幾らかなりとも「向上した」と評価しており、特に著しいのがIIB/Dの100%である。同様なことが「辞書を使うこと」にも見られるが、多くの学生が、これまで余りやっていたいなかった、辞書で語句の意味を調べながら丁寧に英文を読むという課題を通して、読解力や和訳する力が向上

表2：教科書の難易度

科目名	非常に易しい	易しい	普通	難しい	非常に難しい
英語Ⅰ A/C	2	18	73	5	2
英語Ⅰ B/D	5	10	53	32	0
英語Ⅱ B/D	0	14	71	14	0
英語Ⅱ A/C	5	10	53	32	0
英語Ⅱ B(再)	0	4	92	4	0

(数字は%)

したと感じていることが、次に紹介する感想文(付録2)からの抜粋でも明らかである。

- 教科書を読んですぐに、この文がどういう話なのかというのが理解できるようになってきた。....宿題を毎回辞書を使って考えた。
- 辞書の引き方や和訳などが前より出来るようになった。
- 1年間で英文を日本語に訳すのがうまくなった。
- ごく自然な日本語に訳すのがうまくなった。
- 文章を読む力がついたと思う。
- 今まで単語を覚えるのに苦労していました...この単語はどんな意味かなと辞書を引くのが楽しみになりました。そして...
- 分からない単語を徹底的に調べたりするのは大変だったが、辞書を使ってみればこれなんだと思ひ最後までやり通した。

このように、これまで殆ど辞書を引くこともなかった学生が時間をかけて辞書を引き苦労しながらも丁寧に和訳し、出来たことの喜びを書いている。内容を把握するのに和訳をする必要はないが、ある部分については敢えて英文をノートに書き、分からない語句を調べた上できちんと日本語訳を書いて提出することを宿題とした。それは、「何が」「どうした・何である」という構文をしっかり理解させるためであり、何よりも、辞書を引くことで1つの語に多くの異なった意味・用法があることを知り、文中での適切な意味・用法を選ぶ習慣を付けさせる為、即ち英文の意味ではなく学習の仕方を、願わくば同時に、学ぶ「楽しさ」を教える為である。

#### b. 書く力

書くことについては単なる和文英訳ではなく、考えて書くこと (creative writing) を目指した。IA/Cでは自分のことについて書く練習を各章で行なった他、夏休みの宿題として提出された英文エッセイの添削を3~4回繰り返した。それにも拘わらず「全く向上していない」学生は、宿題をしなかった者であろうか。

IIB/Dで9割以上が書く力の向上を認めてい

るのは、後期の後半で行った長崎観光案内を自分で考えて書く活動によるものと推測される。

IB/D, IIA/C, IIB (再) では他の活動に比べて「書く」活動が少なかったが、それがそのまま学生が感じた「向上力」の低い数字に表れている。

#### c. 聴解力

全く形式の異なった4種類の「聴解力養成」にも拘わらず、全ての科目で同じように「向上した」と感じていることは興味深い。IA/Cは普通教室で録音テープの後につけて、又テープと一緒に読むことを繰り返した。IB/Dでは、歌詞の空所を埋める問題を解くために何度もテープを止めては「語」を聴く努力をさせた。一方IB/D, IIA/C, IIB (再) ではLL教室でテープやビデオの英語を毎時間聴いたほか、自分用に録音したテープを繰り返し聞いて発音する練習も行った。

ところで、全ての科目で肯定的な意見が圧倒的に多いものの、ビデオ教材を使って英語を毎回聴いたIIA/CとIIB (再) で聴解力が「向上した」率が揃って75%と、他の3コースの85~88%を10ポイント下回っているのは何故であろうか。学生が教室外で進んで英語の音に触れない限り、授業に出席しないで聴解力の向上を図ることは殆ど見込めない。その点ではIIA/Cの出席率はかなり高く(表1)、他の学生に比べて「聴く機会が少なかった」との要因は該当しない。寧ろ毎回の英語の音に触れる機会は他の科目よりも多かったと言える。

原因としては、使用したビデオ教材が生ニュース番組なのでスピードが速く聞き取り難い、文字が書き表されていないので理解し難い上に分かったという判断がつけ難い、等が考えられる。同じ authentic な教材でもIB/Dの場合は文字を見ながら空所を補うという作業を通して「分かった」手応えを感じたのかもしれない。或いは、ビデオの場合は画面に気を取られる余り、案外「音」をしっかり聴いていないのかもしれない。勿論ここでは学生の感じのみからの判断で実際の「聴解力」を測ったのでもなく、又一度のデータで結論づけることは出来ないが、視覚に頼らず音だけを聞いて



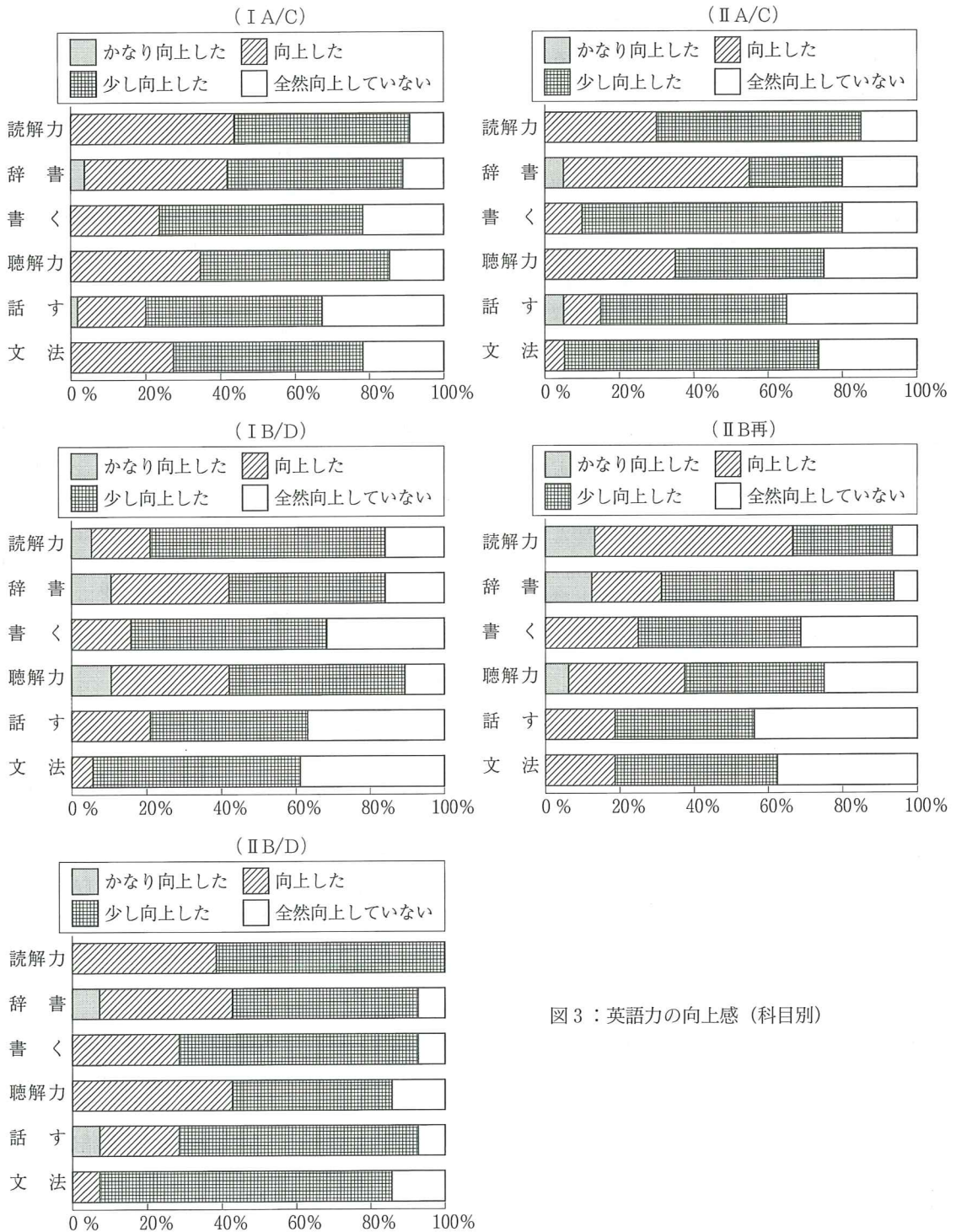


図3：英語力の向上感（科目別）



た全てのクラスでより高い向上感が出ていることは熟考に値する。聴解力養成のより良い教材を考案する際の今後の研究課題となりそうである。

#### d. 話す力

話す力については IIB/D の 9 割以上が「向上した」と答えているものの、それ以外では 7～6 割前後に止まっていて、他の技能に比べると向上感が低い。

IIB/D では自分たちで作った会話を自然に行うなどのペア活動や、自分で考えて観光案内をするなどの、いわゆる creative な活動を多く取り入れたので高い数字が出ていると言えよう。IA/C ではテキストにある会話をペアで行うことを試みたが、これは「会話」というより寧ろ「読む」練習に近かった。他の 3 コースでは毎回の挨拶とゲストを招いた時以外は余り話す機会を作らなかったことが数字に明確に出ている。

いかに多くの学生が英語で話すことを望んでいるかは、今後の学習計画について(付録 3)、回答者 131 人中 43 人が「話すことを学びたい」と書いていることから分かる。この数字は第二位の「資格試験を受けたい」・15 人、第三位の「聴くことを学びたい」・9 人に比べても突出している。従って、他のスキルも伸ばしながら「話す力」も向上させる活動を取り入れることが今後の大きな課題である。

#### e. 文法力

文法はそれのみが一人歩きするのではなく、他の技能、特に読む・書くことと共に向上するが、敢えて項目に加えてみた。IA/C は基礎英語コースなので独立した文法問題も多少取り上げ、自由作文の添削をしながら文法の間違いを正していった。それ以外のコースでは構文(特に主語・動詞)の説明を行った程度である。それにしては、他のスキルに比べると低いものの、IA/C と IIB/D ではかなりの、他の科目では 6～7 割の学生が程度の差はあれ「文法力」が伸びたと実感しているようである。この数字を文字どうり受け止めると、殊更「文法問題」を説かなくとも 4 技能を伸ばす活動を通して文法力は自然と付いてくることの証

明であろうか。この点についても今後の研究課題としたい。

#### f. まとめ

下の表 3 は感想文(付録 3)の第 1 質問、「英語が向上したかどうか。どんな風に？」に対して記述された意見を分析し、具体的なスキルの向上について述べているものを科目ごとに分類したものである。全体の動向を知るために数字は各科目の学生数に占める百分率で示した。また、複数回答もある。

表 3：英語力の向上(感想文から)

	IAC	IBD	IIBD	IIAC	IIB 再
読 解	10	5	14	10	6
和 訳	8	10	36	20	6
辞 書	5	-	-	10	17
書 く	13	-	7	-	-
聴 く	5	53	-	25	28
話 す	8	-	43	-	6
音読・発音	17	16	21	10	6
文 法	30	10	14	5	11
暗 記	2	-	21	-	-
単 語	7	5	-	-	11
考え方・姿勢	-	5	14	5	11

(数字は%：複数回答あり)

この表は、各科目に於いて学生がどのスキルの向上に最も満足したのかを示しているが、同時に教師が何を最も重点的に指導していたのかを客観的に知る資料ともなっている。即ち、IA/C では「文法」を、IB/D、IIA/C、IIB(再)では「聴くこと」を、そして IIBD では「話すこと」を強調していたことになろう。このこと自体は、教科書選びの段階でのこちらの思惑と一致していることから歓迎すべき結果ではあるが、図 3 と併せて見ても、指導の力点の不均衡が見られる科目があることは否めない。

スキルとは別に、5 人の学生が「英語に対する考え方や姿勢が向上した」と、又、1 人が「自分で考えることを学んだ」と述べていることは意義深いことである。

### 3. 3 指導法

分かりやすい指導をすることは教師として最も重要なことである。今回の調査（付録2）によると全体的には131人中50人(38%)が、教え方が「(とても) 分かり易い」と、それ以外は「普通」だと答えており「(とても) 分かり難い」と答えたのは5人だけであった。まずまずの結果だと言えよう。図4はその結果を各科目別に示したものである。

又、感想文（付録3）の「授業の進め方、教え方について」にも、「分からないところや間違ったところを丁寧に教えた」、「ゆっくりで/程良い速さで理解しやすかった」、「レベルを分からない人に合わせていたのが良かった」、「とても分かりやすかった」、「基礎からやり直せた」、「これならついていけると思い1年間やってきた」等の肯定的な意見が殆どであった。しかし、「分かりずらかった」、「時々分かりにくいときがあった」、「文法的に分かりにくい文などを丁寧に訳して欲しい」との意見がそれぞれ1件ずつあったことも留めておかねばならない。授業の速さについては、1課を2週で終えたいところを、上の学生の感想文にもあるように皆が分かるまで指導することを心掛けたので全ての科目で1課に3週を要し、それでも一部は時間の都合で、また程度が高過ぎるために省かざるを得なかった。「ペースが少し遅い」という

不満も2件あったが、98%の学生が満足した「ゆっくりペース」を今後も維持していきたい。しかしその中で、理解の早い学生に対する細やかな対応も考えて行かねばならない。

#### 〈宿題〉

全てのコースで宿題（予習）をして授業に望む方式を取ったのは、週1回の授業中の学習だけでは大きな進歩が期待できないのでそれを補うため、そして授業を効率よく進める為である。また、自宅学習の習慣と共に学習方法を自然に身につけ、授業に積極的に望む姿勢をつけさせる為でもある。その努力に報いるべく、毎回宿題点を加算し、最後には成績の20～25%を「努力点」として評価する旨を初回から打ち出していた。

慣れない学生には負担となったであろうが、その効果は英語力の向上に如実に現れているようである。次に紹介するのは宿題に関する学生の感想の一部である（付録3）。

- 宿題があることで勉強しようと思うので良いことだと思います。
- 予習は宿題を2時間くらいかけてした。
- 宿題をすることで次の授業で勉強するところに目を通すことが出来た。
- 毎回宿題を出されるのはしんどかったが、そのせいもあって授業についていけたので良かった。
- 宿題で前の日の殆どの時間を費やした。そのおかげで授業では何とかみんなのスピードについていけたと思う。まず、ほとんどの英語の単語が分からなくて1つ1つの単語を調べることから始まった。調べることに最後の方は苦痛を感じなくなり、英語に対し、ただ嫌いというだけで向き合わなくなった。
- 宿題を毎週出されるため、とてもつらかったが、やりとげた後の充実感はとても心地よかった。
- 毎回予習をしてきて、それを皆でやっていくというのは結構スムーズで分かりやすかった。
- 予習（宿題）が毎回あるおかげで、コツコツ予習（英語と接すること）が出来て良かった。
- もっと宿題をやって予習すれば良かったと思う。
- 自分の予習不足を悔やんでいます。

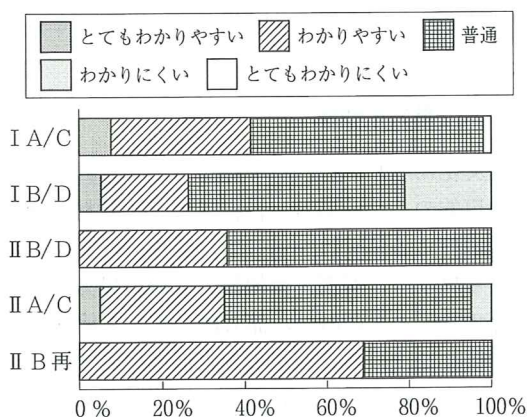


図4：教え方



このように、毎回の宿題に対しては殆ど全員が肯定的な意見を述べており、宿題という1つの目的を通して予習をし、授業に積極的に参加することが出来、従って英語力も向上したと言えるであろう。勿論自主的な学習に勝るものはないが人間は往々にして安易な方向に進みがちであるので、課題を課すことは全ての学生に同じ土俵で（予習をしたという）相撲を取らせる上でも効果的だと思う。その上、学習方法が分からない学生の多い本学の場合には、それを示す上でも効果があるように思う。

宿題をしてきていることを前提に授業を進めるには全員が宿題をしてこないと逆効果になる。それを防ぐために毎回の宿題をチェックし宿題点を与えることで学生の学習意欲を駆り立てたのである。従って、IIB（再）以外のクラスでの平均宿題提出率は毎回8～9割という、ほぼ満足のいく数であった。

### 3. 4 授業の雰囲気

第1回目の授業での調査で、英語が「好き」又は「大好き」：12%、「普通」：35%に対し「嫌い」又は「大嫌い」な学生は53%であった。1年生3クラスだけ見ても、「嫌い」又は「大嫌い」が57%も占めていることから、既に英語嫌いな状態で本学に入学していることが分かる。しかも何と82%以上の学生が自分の英語力を2又は1（5段階評価で）と低く評価している。

このような英語が嫌いで苦手な学生が受講するのであるから、楽しく魅力ある授業でなければ学生はますます英語から遠ざかってしまう恐れがある。

上の図5は、授業が楽しかったかどうかを学生にアンケート調査した結果であるが、それぞれ56%（IA/C）、79%（IB/D）、78%（IIB/D）、55%（IIA/C）、67%（IIB 再）の学生が、「普通」以上に楽しく授業を受けていたことを示している。以下はコメントからの抜粋である。

- 落ち着いて勉強できた。

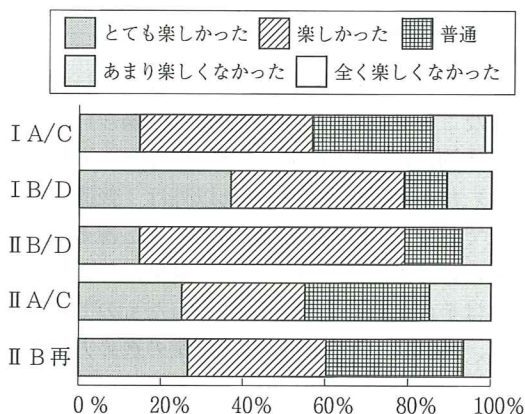


図5：授業の楽しさ

- 授業に集中できた
- 間違っても怒られなくて堅くない授業で良かった。
- 授業中も笑うことがあって、きつくなかった。
- とても和やかで良かった/リラックスできた/受けやすかった/のびのびできた。
- 明るく楽しく勉強できた。
- 授業に積極的に入っていた。
- みんなと友達になれた。
- 眠くならなかったし面白かった。

一方、「(全然) 楽しくなかった」学生も少数ながらいる。この学生に対する配慮も今後必要なわけではあるが、授業を楽しめなかった学生が131人中ほんの7人だけであることは、英語嫌いの学生の比率からしても大きく評価できる結果だと言えそうである。

### 3. 5 異文化理解

異文化に触れ、それを理解することも外国語教育の目的の1つである。書物やビデオ教材、或いは教師自らの体験談を通して、異なった文化圏に於ける異なった習慣・価値観・ものの見方などを紹介することと同時に、諸外国の人々と直接触れ合う機会を設けることができれば理想的である。そのような機会の少ない本学の学生のために、前期と後期に一回ずつ外国人ゲストを招いた。生の



英語に触れ、外国人と直接英語でコミュニケーションする機会、他の国の文化を知る機会を与えるためである。

前期にはアメリカ人男性に2クラスで、後期にはセネガル人男性に5クラスで、各々の国のこと、文化の違いなどについて話してもらい、又、自由会話の場も設定した。会話に慣れていない為か、余り活発な意見交換が出来ないクラスもあったが、それでも色々な点で実り多い試みだったと思う。「感想文」の「その他」の項には、ゲストに関する次のような感想があった。

- 外国の人が来て楽しかった。(10件)
- 外国の人にもっと来て欲しかった。(10件)
- 本場の英語が聴けて良かった。(3件)
- 外国人が来たときもっと英語力があればもっと話が出来たのにと、悔しい思いをした。(2件)
- 自分が知らない国のことを話してもらって良かった。(2件)
- もっとコミュニケーションをとる時間が欲しかった。(1件)
- セネガルの人が来たのが少し怖かった。(1件)
- 外国人が来たのは嫌だった。(1件)

特にゲストについての感想を求めなかったにも拘わらず多くの学生がゲストについて意見を述べていることは、それだけ印象が強かったのであろう。大多数が肯定的な意見を述べている中で2人が、セネガル人のゲストを迎えたとき「怖かった」・「嫌だった」と述べている。その理由は明らかではないが、見慣れない、自分と外見の違う人と接することに戸惑いを感じたのであろうか。

筆者が1997年7月に本学の学生143人に実施した異文化理解に関する調査では(複数回答あり)、欧州88, 北米24, アジア24, 豪州19, 中南米16, に対してアフリカ文化に興味のある学生は7人という非常に低い数字であった。<sup>9</sup>

このことから、書物を通しての異文化理解教育だけではなく実際に様々な国の人々と触れあう機会を出来るだけ多く提供することが必要だと思われる。更に今回の試みのように、共に英語を母

語としない日本人とセネガル人が英語でコミュニケーションすることが出来たという体験は、英語学習の重要性を改めて強く感じさせ、学習への強い動機付けとして作用することも期待できよう。今後とも、アジア、中南米圏等を含めた地元在住・訪問中の外国人との接触の場を設け、異文化コミュニケーションの実践に慣れさせる為の機会を与えたい。

### 3. 6 継続学習の動機付け

学習効果を上げるには学習の動機付けが最も重要なことであるが、一旦学習を始めた学生に対しては、彼らを今後も継続して学習するように導くことが重要である。即ち、1年間授業を受けたことが動機となって学生が更なる学習意欲を持ち、継続して英語を学ぼうという意欲・姿勢を示したとき、教師のその授業での目標が達成されたことになる。

では今回指導してきた学生達が1年間の授業を終え、今後の英語学習に対して意欲を持つことが出来たであろうか。以下に示すのは「今後の学習について」(付録3)書かれた学生の計画・意見を分析・分類したものである。数字は学生の数、括弧内の数字は初めが1年生の、後が2年生以上の数である。

#### 積極的な姿勢

- 来年も頑張る：27 (15, 12)
- 授業は受けないが(せつかく学んだことを忘れないために)色々な形で自分なりに勉強を続けた：17 (2, 15)
- 英語は将来必要なので/世界で通用するのでずっと勉強し続ける：13 (9, 4)
- 来年はもっとやる気を出して頑張る：8 (5, 3)
- 1年間学んで英語が好きになったので2年になっても頑張る：6 (6, 一)
- 必要となった時に勉強する：2 (1, 1)
- 英会話を勉強する：41 (29, 12)
- 資格試験を受ける：16 (9, 7)
- リスニング力をつけたい：8 (6, 2)
- 外国に行きたい/そして自分の力を試したい：8

(6, 2)

- 語彙を増やす: 5 (3, 2)
- 基礎からやり直す: 2 (一, 2)
- 読解力をつけたい: 2 (2, 一)
- 発音を良くしたい: 2 (1, 1)
- 専門書を読めるように勉強する: 1 (1, 一)
- これを機に高校の時のハワイのホストファミリーに3年ぶりに手紙を出そうと思う: 1 (一, 1)

#### 消極的な姿勢

- 受講するかどうか迷っている: 4 (2, 2)
- 単位のために受講する: 1 (1, 一)
- 受講しない: 2 (1, 1)
- 別にない: 1 (1, 一)

このように、ほんの一部の消極的な姿勢を除くと殆ど全員が今後も積極的に英語学習に取り組む意欲を覗かせている。このことは、英語に対する学生の苦手意識を取り除き、興味・関心を持たせ、更に1年間の授業を今後の英語学習継続への足掛かりにさせたいという筆者の究極の目標が達せられたと言っても過言ではあるまい。

### 3. 7 まとめ

以上筆者が1年間指導した5科目(6クラス)の英語の授業について学生による授業の評価や意見を基に、各々の授業が効果的に行われたかどうかを考察してきた。その中で次のような課題が明確になった。

#### 1) より良い教材の開発と探求

英語に対する苦手意識や嫌悪感を持つ学生でも英語に興味を持ち、それによって学習効果の上がるような、更に言葉だけではなく文化や世界の問題を考えさせることも出来るような適当な内容とレベルの教材を開発・探求することは、終わりのない仕事である。

#### 2) 「話す」指導の強化

本学の言語教育センターに於ける外国語教育の目標の一つは、「読む」「書く」「聞く」「話す」という4技能によるコミュニケーション能力を養成することである。<sup>10</sup>今回考察した指導の中で殆どの学生が全ての技能において向上したと満足して

いるのはIIB/Dの1科目だけで、他の科目では「読む」「聴く」に比べると「書く」「話す」能力の向上感が薄いことが分かった。週1度の授業の中で全てを盛り込み全ての学生に全技能で満足させることは至難の業であるが、学生が将来英語に触れる様々な機会—専門書や英文のインターネット情報を読む、電子メールを書いて・読んで外国の仕事相手と交流する、仕事や観光で外国の人と話す・聴く等—を考えると、全ての技能によるコミュニケーション力の基礎をつけさせる必要があると考える。従って、今回の指導で手薄になっていた、しかも多くの学生が望んでいる「話す」能力向上の為の指導をも他の技能同様、強化しなければなるまい。そのためにはIIB/Dクラスで試みたような4技能を同時に向上させる指導をもっと取り入れたい。

#### 3) 理解の遅い学生、早い学生への対応

丁寧にゆっくり指導したことは多くの学生に受け入れられたが、それでも尚「分かりにくかった」、「全く向上しなかった」という学生が2人いた。宿題を添削するなどの個人指導を心掛けたものの、全く宿題を提出しない学生もあり、これは限界かと思うが、引き続き努力したい。

一方、遅いスピードに不満を抱いていた者も少数ながらいた。これら英語が得意な学生は将来英語を使う機会が多いと予測されることから、彼らの能力を十分に伸ばす工夫も考えなければならぬ。例えば彼らの専門分野に近い英文記事を与えるなど、手だてはさほど難しくはなかろう。まず、そのような学生の不満を早く察知する必要がある。

#### 4) 学習意欲の低い学生への対応

全体として出席率は良かったが(表1)、それでも出席日数不足により単位取得が出来なかった、いわゆる学習意欲の低い学生が131人中20人(15%)いた。そのうち11人は再履修クラスであり、ここでは3分の1以上の学生が途中で落伍してしまっている。この学生達は再(々)度英語或いは他の外国語科目を受講するのであろうが、ここでの躓きが得てして退学に繋がる恐れもあり、彼ら



の将来を大きく左右することにもなる。従って、学習意欲の低い学生をも引きつけるような、つまり「受けなければならない」講義から「受きたい」講義となるような魅力ある学習指導と雰囲気作りをすることが大きな課題である。

#### 4. 結 び

国際化や国際交流の必要性が叫ばれて久しい。真の「国際化」「国際交流」とは外国語を駆使することではなく、他の地域の文化、習慣、価値観、考え方の違い等を正しく理解し、お互いの文化を尊重し合う文化相対主義の態度を身につけることである。英語教育の場合はそうした異文化理解教育のための格好の場でもあり、又それも英語教育の目的の一つであることは前に述べた通りである。そして、異文化を理解し国際社会の中でうまくコミュニケーションし合う為に英語教育が必要なのである。特に科学・工学の分野では、技術の急速な発展に対応するために海外の情報をいち早く入手したり情報を交換し合う必要性が高く、英語を使用する機会が多い。その傾向が益々加速されることは明白であり、従って21世紀を担う学生達にとって、英語でコミュニケーションできる能力は大きな武器となろう。つまり、そのような学生を社会に送り出すことが要求されているのである。しかるに、その基盤を作るのに効果的な英語教育の在り方を探求してきたのである。その中で、英語教育に最も必要なことは（恐らく他の教科の教育にも言えることであろうが）「答え」ではなく「学び方」を指導することだと繰り返し主張してきたが、Rogersの次の言葉は筆者のこのような考えをうまく言い得ている。

The only man who is educated is the man who has learned how to adapt and change; the man who has realised that no knowledge is secure; that only the process of seeking knowledge gives a basis for security.<sup>11</sup>

ここで彼は知識そのものではなく、知識を応用して自由に使う方法を知ること、そして知識を求め

る過程が重要であると強調し、本当の教育とは何であるかを示唆しているが、その根底には「人間は皆、学ぶことの出来る生まれながらの可能性を持っているという基本的な考え」<sup>12</sup>が流れているのである。又、下に引用するRogers (Brown 1994)の考え方は全ての教師のあるべき姿のように思われる。

What is needed, according to Rogers, is real facilitators of learning, and one can only facilitate by establishing an interpersonal relationship with the learner. Teachers, to be facilitators, must first of all be real and genuine, discarding masks of superiority and omniscience. Second, teachers need to have genuine trust, acceptance, and a prizing of the other person—the student—as a worthy, valuable individual. And third, teachers need to communicate openly and empathically with their students and vice versa.<sup>13</sup>

即ち、「学習者が必要としているのは学習の世話人 (facilitator) であり、学習者との間に人間関係が築かれて初めて人は世話人足りうるのである。教師が facilitator となるには、まず優越感や博識ぶった仮面をうち捨て真実の姿をさらけ出さなければならない。次に、学生を尊い価値ある人間として心から信頼し、受け入れ、尊重しなければならない。そして教師と学生はお互いに率直に意見を交換し合い、共感し合う必要がある。」

このRogersの思想は教育全般に言えることであるが、外国語教育に於いても多くの研究者が影響を受けている。最近特に話題になっている“learner-centeredness,”<sup>14</sup> “learner-based teaching,”<sup>15</sup> “collaborative learning”<sup>16</sup> “cooperative learning,”<sup>17</sup> “autonomous learning”<sup>18</sup>等と称される外国語としての英語指導法もそうである。これは特に学習者の心理学的、認知学的、経験的要因等による学習者の多様性を大切にし、「何を学ぶか」を学習者自らが考え、学習プランを立てて学習する、即ち学習者に権限を持たせることで学習効果を高めようとするものである。つまり、学習



者自身が教材を持ち寄るので自分たちにとって興味のある、適当なレベルのものを学ぶことになることから、動機付け、継続学習が促進されるという考えである。

Assinder<sup>19</sup>, Prappal<sup>20</sup>, Moulden<sup>21</sup>等は大学生対象のクラスで完全な学習者主導型授業を展開し成功した実践例を示している。Assinder はオーストラリアで学ぶ日本人や韓国人等の学生を対象とした、Prappal はタイの大学でタイ人学生を対象とした、Moulden はフランスの工科大学でフランス人学生を対象とした外国語としての英語教育実践授業の中で取り入れている。それぞれ“Peer teaching: peer learning,” “cooperative learning,” “self-direct learning”等と称しているが共通していることは、各グループの中で学習者が話し合って教材を選び或いは作り、他の学習者への指導を行うことにある。役割を決め、教材を選び、作り、話し合い、指導するという積極的な活動の過程で各人が教え合い学び合い、その過程で4つのコミュニケーション技能を伸ばすことが出来るという理論であり、英語学習の理想的な形のように思われる。そこでの教師の役割は助言者、“facilitator”<sup>22</sup>又は“helper and resource”<sup>23</sup>であり、時には“monitor”<sup>24</sup>に徹することである。言い換えれば、学習者が効果的に学習できるように手助けをし、「勉強の方法」を指導することである。“Learner-based teaching encourages students to work together and learn from each other.”<sup>25</sup>と Tudor が言っているように、学習者中心の学習を通して、学習者は共に学び合い、教え合うのである。

今回筆者が展開してきた指導も学生がリラックスして楽しく学べる雰囲気を作り、学生自身が自ら学ぶ「方法」を見いだせるよう導くことが教師の役割であるという点ではこれらのアプローチと一致している。しかしまだまだ改善すべき余地が多い。本稿で考察してきたように、1年間の実践授業の中で多くの学生が楽しく英語を学び、英語力が向上したと実感し、且つ今後も学習を継続したいという意欲と英語への興味・関心を示してい

る。このことは、学習者中心・共同学習の自由な雰囲気の中では、リラックスして伸び伸びとしかも楽しく学ぶことが出来、それゆえ学習の意欲と向上が促進されるのだということを裏付けているように思う。しかし考察の過程で、欠点も明らかになった。更に効果を上げるためには、そして理解の早い者、遅い者の不満を解消する為にも、より充実した学習者主導の教育を導入すべきだと考える。

Assinder らが実践した、完全な学習者主導の授業を全ての学生にそのまま適用できるかどうかは、そこまでの調査結果を得ていないので不明である。しかしながら、学習意欲を高めながら学習「方法」を身につけさせる、一つの理想的な姿として今後追求していきたい。その中では理解の遅い学生が早い学生に学ぶばかりではなく、理解の早い者も教えることによって自らの知識を確固たる物とすることが出来、両者が協力して学んでいくことで双方からの不満が解消されるだろう。また学習意欲の低い者も、グループの中では自分たちが主役であり活動を円滑に行うには全員の参加が不可欠であるという責任感を認識し積極的に授業へ参加する動機付けとなるに違いない。

以上、筆者の実践授業をたたき台として提示し、それに対する学生の意見等をあからさまに記述しながら指導の問題点を考察してきた。少子化が進む中、大学の門戸は広くなり、しかるに入学してくる学生の英語力やその他の学力、学習意欲が年々低下していることが指摘されている。今回実践・考察してきた学生達も同じ傾向にあり、従って特に、英語が苦手な、或いは学習意欲の低い学生に対する効果的な指導内容・方法等を考察してきたのである。大学のみならず中学・高等学校で英語や他の外国語教育に携わる方々に、ヒントとはならずとも、より良い教育を模索する上で一つの起爆剤にでもなれば幸いである。ここに示してきた筆者の基本方針や指導内容は目新しいものではなく、多くの教師の考えや実践内容と似通っているかもしれない。そうであれば、指導の欠点、

明らかになった問題点, 学生の要望などに共通する要素が多いと考えられる。従ってそのような場合には, 本稿で考察してきた問題点等を参考にさせて頂けよう。更に, 考察の結果一つの理想的な指導法として提案した, 完全な (又はそれに近い) 学生主導による授業 (autonomous learning) を展開しておられる, 或いは今後実践される方々との情報交換が出来れば, 願ったりのことである。

#### 引用文献

- 1 H.H.Stern: *Issues and Options in Language Teaching*, Oxford University Press (1992) pp. 3-4
- 2 H. H. Stern: *ibid.* p. 3
- 3 H. H. Stern: *ibid.* p. 4
- 4 H. H. Stern: *ibid.* p. 5
- 5 H. Dulay, et al.: *Language Two*. Oxford University Press (1982) p.45
- 6 H. Dulay et al.: *ibid.* pp.51-53
- 7 S. D. Krashen, *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Pergamon Press (1981) pp.29-30
- 8 C. Painter: Evaluating Learner Self-Assessment. *JALT Journal*, Vol. 21, No. 1 (1999) pp.87-100
- 9 前川智子: 「大学での異文化コミュニケーション教育」, *The Kyushu Review* 第2号, 九州大学言語文化部 (1997) pp.15-26
- 10 長崎総合科学大学: 『履修ガイド '99』 (1999) p.20
- 11 C. R. Rogers, quoted in M. Williams and R. Burden: *Psychology for Language Teachers*. Cambridge University Press (1997) p. 35
- 12 M. Williams and R. Burden: *ibid.* p. 35
- 13 H. D. Brown: *Principles of Language Learning and Teaching*. 3rd. ed., Prentice Hall, Inc. (1994) p. 86
- 14 I. Tudor: *Learner-centeredness as Language Education*, Cambridge University Press (1996)
- 15 C. Cambell and H. Kryszewska: *Learner-Based Teaching*, Oxford University Press (1992)
- 16 M. Williams and R. Burden: *ibid.*
- 17 K. Prapphal: Cooperative learning in a humanistic English class, *Methods That Work: Ideas for Literacy and Language Teachers*. 2nd ed., ed. by J. W. Oller, Jr., Heinle & Heinle (1993) pp. 358-362
- 18 P. Riley (ed) : *Discourse and Learning*. Longman Inc. (1985)
- 19 W. Assinder: Peer Teaching, Peer Learning: One Model, *Methods That Work: Ideas for Literacy and Language Teachers*. 2nd ed., ed. by J. W. Oller, Jr., Heinle & Heinle (1993) pp.272-280
- 20 K. Prapphal: *ibid.*
- 21 H. Moulden: Extending self-directed learning of English in an engineering college, *Discourse and Learning*, ed. by P. Riley, Longman Inc. (1985) pp. 206-232
- 22 H. D. Brown: *ibid.* p. 86
- 23 C. Cambell and H. Kryszewska: *ibid.* p. 6
- 24 C. Cambell and H. Kryszewska: *ibid.* p. 6
- 25 I. Tudor: *ibid.*, p.15

## 付録 1 : 1998年度科目別授業内容

## (1) [英語 IA/C (基礎英語)] 1年5組, 9組

使用教科書: 『Read It, Write It』(P. McLean 著, 金星堂, 1985)

学生の日常生活など身近な話題が扱われていること, それを応用して学生自身が自分のことについて書く練習が出来ること, 易しい語句と短い文で構成されているので, 基礎から徹底的にやり直そうという学生に相応しいレベルであること等の理由でこの教科書を選定した。しかも副題に“Modern College English”とあるように, 大学生を対象とした教科書なので, 英文が易しくとも学生が劣等感を持つことなく堂々と使用することが出来よう。もう一つの利点は, 書き込み式で, しかも一枚ずつ取り外すことが出来るので学生が提出した課題を丁寧に添削して返すことが出来る点である。

—学習したトピック—

My Day / My Friend / A Letter to a Friend / The Weather / My Family / A Trip

—1課の学習の流れ—

1. 身近な話題(大学生活や天候など)についての1ページ弱の易しい読み物を読む。辞書を使って語句の意味を調べながら丁寧に和訳することで, 内容を十分に把握すると同時に英語の表現に慣れる。(宿題 / 授業中に確認)
2. 録音テープを繰り返し聞き, 正しい発音を心掛けながら何度も読む。
3. 本文を利用して自分自身のことについて書く。(宿題 / 集めて添削 / 次の授業でコメント)
4. 本文の内容に即した会話文を完成させることで内容の理解を深める。(宿題 / 授業中に確認)
5. ペアで会話練習をする。
6. 文法問題を解きながら英文法の基礎を固める。(宿題 / 授業中に確認)
7. 録音テープと同時に読む練習を2～3回行う。

\*このような流れで1課を3週かけてゆっくり進み, グループやペア活動, 個人指導を中心に基礎から指導し, 提出された課題の中でも英作文に関しては特に丁寧に添削するよう努めた。

## (2) [英語 IB/D]

使用教科書: 『The Carpenters 22 Hits』(J. House 著, 成美堂, 1998)

受講生の殆どが「IA/C」(別の指導者)を受講している。この科目は「IA/C」と平行して英語の基礎力を付けることを目標としているが, どちらかというと言文法中心の「IA/C」クラスとは趣を変えて「歌」を取り入れた。歌詞が明確でテンポが遅く聞き取りやすく歌い易い, しかも軽快で楽しく若者の間でも依然人気があり学生にも聞き慣れたメロディーである, 等の理由でカーペンターズの歌を選んだ。使用したテキストは単に聞き取り練習ばかりではなく, 読解力や文法の学習も出来るよう配慮されている。

—取り上げた歌—

Sing / Only Yesterday / Ticket to Ride / Top of the World / Please Mr. Postman /  
Jambaraya / Yesterday Once More

—1課の学習の流れ—

1. 歌の背景を説明している短い物語を辞書を使って語句の意味を調べながら和訳する。ただし, 中には構文が複雑な長い文もあるので, きちんとした日本語にしなくても良いが, 内容を把握しておく。(宿題 / 授業中に確認)
2. その問題についての内容読解問題の英文を和訳しながら, 構文を学ぶと同時に物語の内容を把握して



いるかどうかを確かめる。(宿題 / 授業中に確認)

3. 歌を何度も聞きながら、所々空所になっている英文の歌詞を完成させる。その後、正しい自然な発音で読む・歌う練習をする。
4. 歌詞から英語らしい表現を学び、歌の中での意味を考える。(宿題 / 授業中に確認)
5. 内容と構文の両方から考え、2つの句や節を合わせて1つの英文を作る問題を解きながら、英語の表現と構文を学ぶ。(宿題 / 授業中に確認)

\* 以上のような授業を通して文法、音読、読解力、聴解力、発音等を指導した。歌の場合、音の同化 (assimilation)・連結 (liaison)・省略 (elision)・縮約 (contraction)・重音脱落 (haplology) などが頻繁に起こるので、その点を指摘しながら聞き取りや自然な発音のコツを指導していった。「読み物」を教科書用に録音している英語と比べ聞き取りも発音も難しいが、authentic で自然な英語の音に触れることが出来たのではなかろうか。

### (3) [英語 IIB/D] 2年1組

使用教科書:『Going places』(D. H. Nagatomo 著, 金星堂, 1996)

学生への希望調査結果, 人気が高かった観光英語<sup>※1</sup>を取り上げた。日本人学生がアメリカで遭遇する様々な場面が設定されており, 異文化理解を深めながら英語によるコミュニケーション能力を養うことを目標とした。「読む」, 「書く」, 「聴く」の外に, 会話場面を設定しペアで会話を楽しむ機会を毎回持った。

—目次の一部—

The Airport / Staying with a Family / The Bank / Television

—1課の学習の流れ—

1. “Key phrases”の英文の意味を調べておく。(宿題・授業で確認)
2. 上の英文をLL装置で各自のテープに録音し, 繰り返し聞き・音読する。いくつかを暗記する。
3. 短い説明文と会話文を読んで, 内容把握問題に答える。(宿題・授業で確認)
4. その文を繰り返し読む練習をする。
5. 順序がバラバラになっている会話文を並べ替えて筋の通った話を作る。(宿題・授業で確認)
6. 完成した文を暗記して, ペアで会話練習をする。

\* 後期の後半には, 長崎市内の観光パンフレットを利用して自分流の案内文を作ることによって4技能によるコミュニケーション能力の向上に努めた。つまり各人が英文の資料を集め[読む], それを基に自分の興味や英語力に合わせた自分用のガイドノートを作り[書く], それを使ってガイドの練習を行い[話す・聞く], 更に模擬観光案内を行う[話す・聞く]という演習である。<sup>※2</sup>

### (4) [英語 IIA/C] 2年7組

[英語 IIB (再)] 3年生以上の再履修者

使用教科書:『Asia now』(長谷川潔 他著, 成美堂, 1997)

タイトルが示すとおり, アジア諸国の話題を扱ったビデオ教材である。学生諸君に欧米ばかりではなく近隣諸国にも目を向けてもらいたい, 英米以外の様々な英語のアクセントにも慣れ親しんで欲しい, 情報

<sup>※1</sup>前川智子:「学習意欲を高めるための教材を求めて—観光英語の導入に関する一考察」『長崎総合科学大学紀要』, 第38巻第2号(1998) pp.243-254

<sup>※2</sup>前川智子:「観光通訳ガイドの実践と英語教育」『鉄村春生教授退官記念教育論文集』長崎大学教育学部英語科(1998) pp.67-82

伝達的手段としての英語の役割を実感することで英語への関心を高めて欲しい、との願望でこれを選んだ。  
— 取り上げた内容 —

日本食ブーム (タイ, インドネシア) / ポケベルと名刺ブーム (韓国) / 国民的スポーツ・野球 (台湾) / 「おしん」人気再び (ベトナム) / 買い物天国 (オーストラリア) / ユニークな市内観光・北京 (中国)  
— 1 課の学習の流れ —

1. 番組を理解する上でポイントとなる語句や文が紹介されているので予習しておく。(宿題 / 授業中に確認)
2. LL 装置を使ってこれらの語句や表現を各自で何度も聴き・読む練習をする。
3. 番組の冒頭部分のみ(全体の 3 分の 1 程度)が文字で書き表されているので読んで内容を掴む。(宿題 / 授業中に確認)
4. 番組の内容を予測できたところで初めてビデオを観る。(3 回くらい)
5. 「True-False Questions」の英文を和訳し、内容と合っているかどうかを考える。(宿題 / 授業中に確認)
6. 上の問題についてビデオのどの部分で分かるかに留意しながら 2～3 回ビデオを観る。
7. 英作文 (宿題 / 授業中に確認), ディクテーション。

\*このような流れで、本来 1 課を 2 週で終わるように構成されているテキストを 3 週かけてゆっくり進んだ。

## 付録 2 : アンケート調査 (1999 年 1 月実施) から

使用した教科書について

とても易しい    易しい    普通    難しい    とても難しい

授業のすすめかたについて

とても面白い    面白い    普通    面白くない    全然面白くない

教え方について

とても分かりやすい    分かりやすい    普通    分かりにくい    とても分かりにくい

次の英語力が向上したと思いますか。

英文を読んで内容を把握する力:	かなり	ある程度	少し	全然
辞書を使って英文を丁寧に読む力:	かなり	ある程度	少し	全然
英語で文を書く力:	かなり	ある程度	少し	全然
英語を聞いて理解する力:	かなり	ある程度	少し	全然
英語で話す力:	かなり	ある程度	少し	全然
文法力:	かなり	ある程度	少し	全然
その他 ( ):	かなり	ある程度	少し	全然
授業全体は楽しかったですか:	とても楽しかった	楽しかった	普通	
	あまり楽しくなかった	全然楽しくなかった		

## 付録 3 : 感想文 [1 年間のこの授業を振り返って] (1999 年 2 月実施)

1. 英語力が向上したかどうか。どんな風にな?



2. 予習, 復習はどれ位したか。
3. 授業の進め方, 教え方についての意見
4. このクラスの雰囲気について。
5. その他の意見
6. 今後の英語学習の計画について